

北海道医療大学学術リポジトリ

小児看護学実習において学生が患児とその母親の3人で過ごす体験

著者	菅原 美保
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	13
号	1
ページ	21-26
発行年	2017-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00064468/

〔研究報告〕

小児看護学実習において学生が患児とその母親の3人で過ごす体験

菅原 美保

専門学校日本福祉看護・診療放射線学院

要旨

本研究の目的は、小児看護学実習中の学生が受け持ち患児とその母親との3人で過ごす場面における体験を明らかにすることである。小児看護学実習を終了した学生で、乳幼児期の患児に母親が付き添っていた事例を受け持ち、研究に承諾が得られた10名に半構造的面接を実施し、質的帰納的に分析した。実習当初に、学生は3人で過ごす場面で【母子の絆の強さを感じる】ことや【自分と患児や母親の距離感に困惑する】体験をして【母親の疲労や不安に気づき働き掛ける】、【母親や患児の気持ちに配慮して援助する】ことを積み重ね、徐々に【母親や患児と感情を共有する】ことができ、【自分と母親や患児との関係性の深まりに温かい感情を抱く】ようになった。また、学生は【母親の助けを得て患児に関わる】一方で、【母親の存在に重圧を感じながら患児に援助する】体験をしていた。教員は、このような学生の心理状況を理解し、学びをサポートする必要性が示唆された。

キーワード

小児看護学実習、学生、患児、母親、関係性

Ⅰ. はじめに

子どもは、特定の養育者による愛情ある世話が不可欠な存在であり、入院した際に母子が分離される環境は望ましくない。そのため子どもの入院時には、養育者である母親が付き添っていることが多い。また、小児看護の対象は患児だけではなく、付き添いの母親も含まれ、患児と母親を1つのユニットと捉える視点が必要である。

小児看護学実習を行う学生にとっても同様に、患児と母親を看護の対象ととらえ、限られた時間のなかで母子双方に関わり、良好な看護を提供することが求められる。

川田・木村・小暮・小林・林・狩野(2005)は実習場面から学生の「コミュニケーション能力の乏しさ」を指摘している。現代の学生は、子どもと接する経験が乏しいうえに、受け持ち子どもの年齢が低ければ低いほど、言語的コミュニケーションをとることが難しくなる。さらに入院を余儀なくされた患児は体調不良による不機嫌な状態にあり、啼泣していることが多いため、学生にとって小児看護学実習は、難易度が高いといえる。

小児看護学実習を行った学生を対象とした先行研究を概観したところ、学生が体験する困難(上村・重松・藤田・小野, 2007)や戸惑い(阿部・佐藤・合田, 2011)といった否定的側面の研究が多く、満足感(門

谷・野村・信太, 2010)といった肯定的側面の研究は少ない。また、学生と子ども、学生と母親といった2者関係に焦点を当てた研究は多いが、学生と受け持ち患児、その母親の3者関係に焦点を当てた研究はみられなかった。

そこで、本研究では学生と受け持ち患児、その母親、という3者で過ごす場面で、学生がどのような体験をしているのかを明らかにすることで、短い実習期間で効果的に看護実践を行えるよう示唆を得たいと考えた。

Ⅱ. 研究目的

小児看護学実習中の学生が受け持ち患児とその母親との3人で過ごす場面においてどのような体験をしているのか明らかにすることを目的とする。

Ⅲ. 用語の操作的定義

本研究における体験とは、「その場で遭遇した出来事に対する認識と心理状態およびその時にとった行動と、その行動の意図や帰結。また、その出来事に対する意味付けも含むもの」と操作的に定義した。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究協力者

看護師養成施設と看護系大学に在籍中の小児看護学実習を終了した学生で、乳幼児の患児に母親が付き添っていた事例を受け持ち、本研究に承諾が得られた者10名であった。

<連絡先>

菅原 美保

専門学校日本福祉看護・診療放射線学院

2. **データ収集方法**：インタビューガイドに基づく半構造的面接法を実施した。面接は、学生の負担を避けるため夏休み期間等を利用し、個室を確保してインタビューを行った。研究参加者にインタビューを始める前に内容を録音することに対して説明し、同意が得られた場合のみインタビュー内容を録音させていただいた。1人につき1回で1時間程度行なった。

3. データ収集内容

1) **学生の背景**：年齢、性別、実習病院。

2) **受け持ち患児の特性**：年齢、性別、疾患。

3) **受け持ち患児とその母親との3人で過ごす体験**：受け持ち患児と母親との3人で過ごしたときに印象に残った場面を想起し、遭遇した出来事、出来事に対して学生としてとった行動とその意図および帰結、その時の子どもと母親の様子、その時の心理的状态、その出来事に対する意味付けなど。

4. 分析方法

研究協力者の語りを逐語録に起こし、学生が患児とその母親との3人で過ごしている場面での体験を語っている内容を抽出した。抽出したデータをコード化し、類似した意味を持つ内容ごとにまとめ、カテゴリー化した。分析にあたり、質的研究の経験者よりスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、北海道医療大学看護福祉学研究科倫理委員会の承認（承認番号15N013013）を得た。また、看護師養成施設と看護大学の各責任者に研究主旨を説明し、承諾を得た上で、協力が得られない場合でも、成績等への不利益を被らないことも口頭と文書で明示し、研究協力者から同意を得た。

V. 結果

1. 研究協力者と受け持ち患児の概要

研究協力者は、21歳から25歳で、全員女性だった。実習施設は1名が大学病院、9名が総合病院だった。受け持ち患児の年齢は、0歳児が1名、1～2歳が8名、5歳が1名だった。性別は男児が6名で女児が4名、疾患は8名が肺炎や胃腸炎等の急性期疾患だった。

2. 小児看護学実習において学生が受け持ち患児とその母親との3人で過ごす体験

小児看護学実習において、学生が患児とその母親との3人で過ごす体験について分析した結果、学生と受け持ち患児とその母親との関係性に関する5のカテゴリーと14サブカテゴリー、学生が受け持ち患児とその母親に提供した援助と意味づけに関する5カテゴリーと17サブカテゴリーを抽出した（表1）。以下、カテゴ

リーは【 】、サブカテゴリーは《 》、コードを〈 〉、学生の言葉を「 」で示す。また語りのわかりにくい表現は、前後の文脈を踏まえ（ ）で補足した。

1) 【自分と患児や母親との距離感に困惑する】

学生は、訪室時に患児に泣かれ、《患児に関わりを拒否されて困惑する》体験をしていた。さらに、泣く患児をあやす母親を見て、《患児への自分の関わりのせいで母親に迷惑をかける》と感じていた。また、おもちゃで患児の機嫌を直そうとしてもうまくいかず、「(母子に入る)隙間はなかった」と感じており、《母子関係に入り込むことの難しさを感じる》という体験をしていた。

2) 【母子の絆の強さを感じる】

学生は「お母さんはやっぱり、子どもの楽しい姿が一番喜びになるというか、やっぱり(子どもの)つらい姿を見ればお母さんもつらいし、その相互作用というか(を感じた)」と語り、《母親が子どもを思う気持ちに気づく》体験をしていた。また、「やっぱりお母さんが一番で、赤ちゃんにとってお母さんが一番で自分を守ってくれる存在なんだろうな、て思いました」といった語りにあるように、《患児にとって母親の存在が大切であることに気づく》体験をしていた。

3) 【母親や患児と感情を共有する】

学生は、「(患児と遊んでいる時に母親が)一緒に楽しんでるような感じでした」と語り、《学生と患児と母親の3人で遊びを楽しむ》体験をしていた。また、患児の体調の変化や母親の感情を感じ取り、《患児の回復を母親と一緒に喜ぶ》、《母親と一緒に患児の体調不良に不安を感じる》といった体験をしていた。苦手な内服を患児が頑張った場面では、《患児の頑張りを3人で共有する》体験をしていた。

4) 【自分と母親や患児との関係性の深まりに温かい感情を抱く】

学生は、「お母さんと関係性を築くことで『仲好そう』て訳じゃないですけど、親密にコミュニケーションを図っていることで、子どもへの安心感につながる、ていうか…やっぱり小さい子、て警戒心を抱くじゃないですか？ですけど、やっぱりお母さんと話していると、この人は大丈夫、ていうか、そっちの(母親との)関係ができると、(子どもとの関係も)深まる可能性が広がる、ていうか…今回は対象が1歳だったので、言葉が通じるお母さんとの関係性が深まると、赤ちゃんとも信頼関係が結べる、ていうか」と語った。このように《母親と良い関係ができると患児との信頼関係も結べる》ことを実感し、《母親から信頼を得られてうれしく思う》体験をしていた。また、「…ずっと発熱してて、患児がその5日目にやっと熱が下がったんですよ。その4日間いく私達に関わろうとしても『お母さんお母さん』みたいな感じで泣いちゃったんですけど、5日目ですごい調子がよくて、すごい笑顔向け

てくれて、それが可愛くて仕方なかった！体調の悪さから出るのもあるのかな、て」という語りにあるように、《患児の回復に伴い自分との関係が深まる》ことや、《徐々に心を開いてくれる患児に愛おしさを感じる》体験をしていた。

5) 【患児と母親の緩衝材になる】

「D君（患児の名前）に（学生が）お母さんこう言ってるからこうしようね、ってお母さんの前でいうと、（患児が）できたりすると『あ～ありがとう』って、（母親が）D君偉いね、ってなったので…そういうのを毎日続けた」という語りにあるように、母親が患児を叱っている場面で、母子の間の気まずい雰囲気を感じ、母親の気持ちを代弁し、患児に伝えることで《患児と母親の間に入って関係を和らげる》という働きかけをしていた。

6) 【母親の疲労や不安に気づき働き掛ける】

「休めてないかなと思ったんで、お母さんが、（患児が）夜中嘔吐したり、なかなか赤ちゃんが寝つけない時とかあったんで、休める環境を作ってあげたいと思って、ベット周り整理したり、訪室したときに『何か手伝えることはありませんか？』とか…あと処置まとめて行うようにして、なるべく休める時間あるといいかな、て思って…そうすると少し気持ちにも余裕でくるかな、て思ったんで」という語りにあるように学生は《母親の疲労を感じとる》ように、自分にできる事を模索し、《母親の疲労軽減のために実践する》ことをしたり、《母親の不安軽減のために患児の様子を伝える》ことをしていた。

7) 【母親や患児の気持ちに配慮して援助する】

「今しかない！って（母親に）言いたいんですけど…今（呼吸音を）聞きたいって思うんですけど…病気を持ってる大事なお子さんなので、そういう（自分と母親の）関係も崩したくないというのもあるので～…なんか嫌な思いをさせない方がいいか、とか…お母さんの思いを…汲むじゃないんですけど～」というように、学生は《母親の言動から気持ちを汲みとる》ことをして、《看護援助よりも母子の気持ちを優先する》という行動をとっていた。また、《患児が自分に望むことを考える》ことや、《母親に相談しながら患児に援助する》ことをしていた。

8) 【母親の助けを得て患児に関わる】

「聴診するときも、本人動いてるときとかは聞きやすいように、身体を向けてくれたりとか、だっこしてお母さんに気を向けているときに、背中からちょっと聞かせてもらったりとか、あと一緒におもちゃであやす時も、お母さんも一緒に、混じりながら『いいおもちゃだね！楽しそうだね！』っていうことを（母親に）声かけてもらいながら、一緒に、やってみました」という語りのように、学生は技術援助の時に患児が泣いてしまうと正確に測定できないため、《患児に泣かれな

いように母親とともに工夫する》ことをしていた。また、ごっこ遊びに母親も参加してもらうなど、《母親に見守られながら患児と遊ぶ》ことや、《患児を理解するために母親から情報収集する》ことをしていた。また、「（タッピングの）手順とか、私たちごちなかったところもあって、そういうところも優しく見守ってくれるお母さんで、さりげなく教えてくれる。タッピングしている様子もさりげなく見せてくれる…たくさん教えてもらったことがありました」という語りにあるように、《母親にお手本を見せてもらう》ことをしていた。

9) 【母親の存在に重圧を感じながら患児に援助する】

「患児のバイタルとか情報収集とか…お母さんに声を掛けて…許可を得て行うんですけど、（母親の）顔色を伺うというか…」や、「これはどういう根拠でやってるんですか？て指導者さんのように（母親に）聞かれないかな…」という語りにあるように学生は、《母親の前で患児に援助するプレッシャーを感じる》体験をしていた。また、《自分の中で考えすぎて母親に遠慮しすぎる》こともあった。しかし、徐々に《母親の言動に左右されずに行動できるようになる》自分を実感している学生もいた。

10) 【自分の看護援助の効果を考える】

「…学生（が受け持ちとして）について良かったかな、て…お母さんも時間作れたし、子どももストレスため込まないで、1度（母親が）お家に帰る事が出来ましたし…」と語った学生は、母親と世間話をすることや母親の代わりに患児の遊び相手となることを実践していた。その実践を振り返り《母親を気分転換させることができた》という効果を実感していた。その一方で、実習を振り返り《患児のことだけ援助してしまい母親の役に立つことができなかった》体験を語った学生もいた。さらに、《自分の関わりが患児の社会性を養った》ことを実感できた学生もいた。

V. 考察

1. 学生と受け持ち患児および母親の3者の関係

本研究において、学生は受け持ち患児と関係を構築するため、コミュニケーションを取ろうとするが、自分を見て泣く患児を前にして、《患児に関わりを拒否されて困惑する》体験をしていた。上村他（2007）は、小児看護学実習で学生が啼泣する患児の対応に困惑したことを明らかにしており、本研究の結果と一致していた。また《患児への自分の関わり方のせいで母親に迷惑をかける》と感じ、【自分と患児や母親との距離感に困惑する】体験をしていた。学生は、自分が訪室したせいで患児が泣き、そのため母親に患児をあやさなくてはならないという負担を強いてしまい、その結果、母親との関係もうまくいかず、《母子関係に入り込むことの難しさを感じる》という体験をしていた。これ

は、患児だけでなく母親も含めた3人で過ごす場面ではなければ得られない小児看護学実習に特徴的な体験であったと考える。

学生が受け持ち患児とコミュニケーションをとる難しさの要因には、患児の体調不良からくる不機嫌さに加え、低年齢であるため人見知りや言語発達の未熟さがあった。加えて、低年齢の児ほど、母子間のつながりは強い。本研究の協力者10人中9人が3歳未満の低年齢児を受け持ち、【母子の絆の強さを感じる】体験をしていた。この体験は、学生にとって《母子関係に入り込むことの難しさを感じる》要因になり、【自分と患児や母親との距離感に困惑する】体験につながっていた。

合田・阿部・佐藤(2012)は、母親の疲労に対し、学生が母親の休息時間を作ることや母親をねぎらうなどの看護援助を実施していたと報告している。本研究においても学生は、母親の疲労を察し、患児への看護援助の時間調整や、患児の遊び相手になり、《母親の疲労軽減のために実践する》ことをしていた。実習当初には、【自分と患児や母親との距離感に困惑する】ことが多かった学生も、講義で得た知識や臨床指導者からの助言を活かし、このように【母親の疲労や不安に気づき働き掛ける】ことで、徐々に母親と良い関係が構築できていた。学生が《母親の疲労軽減のために実践する》ことは、《母親から信頼を得られてうれしく思う》ことにも繋がり、母親との関係性を深める要因になったと考えられる。さらに学生は、《母親と良い関係ができると患児との信頼関係も結べる》と実感していた。つまり、学生は母親を糸口として患児と関係の構築が出来るように積極的に働きかけていた。また、学生は《看護援助よりも母子の気持ちを優先する》といった【母親や患児の気持ちに配慮して援助する】ことをしており、このことも母子との関係が良好になる要因になったと考える。

本研究の協力者が受け持った患児の多くは、急性期疾患であったことから実習が進むにつれて患児の健康も回復した。それに伴い、《学生と患児と母親の3人で遊びを楽しむ》体験が語られた。学生は、患児の体調や機嫌が良くなることで接近しやすくなり、遊びを通じて患児と母親の3者でコミュニケーションをとり、楽しい感情を共有できるようになった。このように3者で過ごすことで【母親や患児と感情を共有する】体験を重ねることができ、それが【自分と母親や患児との関係性の深まりに温かい感情を抱く】体験につながっており、時間の経過とともに3者の関係性が良好になり、多くの学生は3者で過ごす場면을肯定的にとらえることができるようになっていた。

患児が母親に怒られている場面で、意図的に《患児と母親の間に入って関係を和らげる》ことをした学生は、【患児と母親の緩衝材になる】ように介入してい

た。細谷・渡辺・生須・真下(2004)は、小児看護学実習において、学生が影響して患児―母親関係を促進していたという結果を導き出している。本研究においても同様に、学生の意図的な関わりが母子間の関係に良い影響を与えられる可能性が示唆された。

2. 学生が患児に看護援助を提供する時の母親の存在

本研究において、学生は、《患児に泣かれないように母親とともに工夫する》など、看護援助の場面で【母親の助けを得て患児に関わる】ことをしていた。佐藤(2008)は、小児看護学実習で治療・処置を受ける患児への援助の際に、学生が母親の協力を得ていたという本研究と同様の結果を得ている。また、関他(2004)も、苦痛のある患児への援助として、子どもを安心させるために母親の協力を得ていたことを導き出していた。学生が、【母親の助けを得て患児に関わる】ことは、単に補助的な役割を母親に求めているのではなく、《患児にとって母親の存在が大切であることに気づく》からであり、患児に安心を与えながら援助を行うという意味があると考えられる。このように、学生にとって母親は、患児に関わる際に、自分の助けになる心強い存在であるだけでなく、母親に協力を得ることで患児にも良い影響があった。

その一方で、学生は【母親の存在に重圧を感じながら患児に援助する】という体験をしていた。阿部他(2011)は母親が学生に向ける、不機嫌な態度や拒否的態度といったネガティブな態度に、学生が戸惑いや不安を感じていたことを報告している。本研究の学生も、受け持ち当初は、母親の言動から、自分が歓迎されないような雰囲気を感じ取っていた。また、学生は《母親の前で患児に援助するプレッシャーを感じる》体験をしており、その要因として学生の技術の未熟さや自信のなさ、緊張、母親との関係性が良好でないことなどが考えられる。このように学生は患児に看護援助を提供する際に、母親の存在に両価的な感情を抱いていた。

3. 看護教育への示唆

小児看護学実習には、学生と患児とその母親の3人で過ごす場面が多いという特徴がある。学生は受け持ち当初に、今までの実習とは異なり、患児に泣かれたり、関わりを拒否され【自分と患児や母親との距離感に困惑する】体験をしていた。西田他(2003)は、小児看護学実習において、学生は子どもとの関係づくりに不安があり、コミュニケーションや子どもの拒否が怖いと感じていることを明らかにしており、本研究の結果と同様に、関係構築の難しさが学生にネガティブな感情を生じさせていた。このように、学生が実習開始時から患児とその母親との関係の構築に苦慮している様子が見られた際、教員は、学生の困惑の気持ちを

理解して、心理的な支えになることが重要だと考える。また、学生には、患児が学生の関わりを拒否している理由として、体調の悪さから来る不機嫌や環境変化によるストレスがあること、特に低年齢児の場合、健常な発達として人見知りが見られるため、学生に非があるわけではないことを理解してもらう必要がある。

また、学生が母親と良い関係を構築するには時間がかかる。本研究協力者の学生が行っていたように、【母親や患児の気持ちに配慮して援助する】こと、【母親や患児と感情を共有する】こと、【母親の疲労や不安に気づき働き掛ける】ことなどの体験の積み重ねが母親との関係構築につながる。そのため、3人で過ごす場面を少しでも多く持てるように、学生の訪室を後押しすることも教員の重要な関わりであると考え。

患児に援助する際、学生が《母親の前で患児に援助

するプレッシャーを感じる》ことや、《自分の中で考えすぎて母親に遠慮しすぎる》という傾向があることを教員が理解し、【母親の存在に重圧を感じながら患児に援助する】様子がみられる学生には、教員も一緒に訪室して母親とコミュニケーションを取るなど、学生が母親に対して感じる重圧を緩和することも大切である。さらに、母親が患児に付き添っていることを強みにとらえて【母親の助けを得て患児に関わる】ことができるよう、学生をサポートしていくことが、学生にとって肯定的な実習体験につながると考えられる。

実習を終えた学生は、自らの体験から、【自分の看護援助の効果を考える】ことができていたため、実習終了時には、教員は学生と一緒に実習を振り返り、学生の看護援助や体験の意味を考える作業が必要だと考える。

表1. 学生が受け持ち患児とその母親の3人で過ごす体験

	カテゴリー	サブカテゴリー
学生と受け持ち患児とその母親の関係性	自分と患児や母親との距離感に困惑する	患児に関わりを拒否されて困惑する
		患児への自分の関わりのせいで母親に迷惑をかける
		母子関係に入り込むことの難しさを感じる
	母子の絆の強さを感じる	母親が子どもを思う気持ちに気づく
		患児にとって母親の存在が大切であることに気づく
	母親や患児と感情を共有する	学生と患児と母親の3人で遊びを楽しむ
		患児の回復を母親と一緒に喜ぶ
		母親と一緒に患児の体調不良に不安を感じる
		患児の頑張りを3人で共有する
	自分と母親や患児との関係性の深まりに温かい感情を抱く	母親と良い関係ができると患児との信頼関係も結べる
		母親から信頼を得られてうれしく思う
		患児の回復に伴い自分との関係が深まる
学生が受け持ち患児とその母親に提供した援助と意味づけ	患児と母親の緩衝材になる	徐々に心を開いてくれる患児に愛おしさを感じる
		患児と母親の間に入って関係を和らげる
		母親の疲労を感じとる
	母親の疲労や不安に気づき働き掛ける	母親の疲労軽減のために実践する
		母親の不安軽減のために患児の様子を伝える
		母親の言動から気持ちを汲みとる
	母親や患児の気持ちに配慮して援助する	看護援助よりも母子の気持ちを優先する
		患児が自分に望むことを考える
		母親に相談しながら患児に援助する
		患児に泣かれないように母親とともに工夫する
	母親の助けを得て患児に関わる	母親に見守られながら患児と遊ぶ
		患児を理解するために母親から情報収集する
		母親にお手本を見せてもらう
		母親の前で患児に援助するプレッシャーを感じる
	母親の存在に重圧を感じながら患児に援助する	自分の中で考えすぎて母親に遠慮しすぎる
		母親の言動に左右されずに行動できるようになる
		母親を気分転換させることができた
	自分の看護援助の効果を考える	患児のことだけ援助してしまい母親の役に立つことができなかった
		自分の関わりが患児の社会性を養った

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の研究協力者が受け持った患児の年齢には偏りがみられた。また、本研究では2つの教育機関に所属する学生が対象であったが、研究協力者の所属する教育機関での小児看護学実習の目標設定により、異なる結果が得られる可能性も否めない。さらに、本研究では急性期疾患を受け持った学生が多く含まれており、受け持ち患児が急性期疾患と慢性期疾患である場合、結果に相違がみられる可能性がある。今後、学生の所属する教育施設や患児の年齢や疾患など対象を広げ、さらに学生が患児とその母親との3人で過ごした体験を明らかにしていくことが課題である。

受付：2016年11月30日

受理：2017年2月3日

謝辞

本研究を行うにあたり、面接にご協力くださった学生の皆様、ご指導くださった教授に心から感謝致します。

引用文献

- 阿部裕美, 佐藤佳代子, 合田友美 (2011). 看護学生と受持ち患児の母親との関係形成に向けた効果的支援の検討—母親とのかかわりの中で困惑した場面に焦点を当てて—. 川崎医療短期大学紀要 (31), 21-26.
- 合田友美, 阿部裕美, 佐藤佳代子 (2012). 小児看護学実習で母親との関係形成のために看護学生がとる行動の実態. 川崎医療短期大学紀要 (32), 39-43.
- 細谷京子, 渡辺美穂, 生須典子, 真下茂美 (2004). 小児看護学実習における学生の受け持ち患児および家族に及ぼす影響. 群馬県立医療短期大学紀要, 11, 79-89.
- 門谷あゆみ, 野村里恵, 信太照美 (2010). 小児看護学実習における看護学生の実習満足に結びつく体験—フォーカスグループインタビューにより得られた看護学生の言葉から—. 第41回小児看護, 64-67.
- 上村まや, 重松由佳子, 藤田稔子, 小野正子 (2007). 小児看護学実習における困惑した場面の要因及び学びの分析—看護場面の再構成を通して—. 西南女学院大学紀要, 11, 33-41.
- 川田智美, 木村由美子, 小暮深雪, 小林三重子, 林元子, 狩野太郎 (2005). 看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面. 群馬保健学紀要, 26, 133-140.
- 西田みゆき, 北島靖子 (2003). 小児看護実習における学生の困難感. 順天堂医療短期大学紀要, 14, 44-52.
- 佐藤和津江 (2008). 小児看護学実習において学生が体験する困難とその対処について. 旭川荘研究年報, 39(1), 79-81.
- 関美知代, 菅谷千恵子, 宮口恵美子, 山本郁子, 山下容子, 小口多美子 (2004). 小児看護学実習において学生が直面する困難への対処方法. 日本看護学会論文集小児看護, (34), 56-58.